

## 歯科衛生士学科研究会講演抄録

第22回：4月22日（木）

### マウス骨髄細胞の分化に 及ぼすNaFの影響

小黑 章 教授

8週齢雄 ddY マウス骨髄細胞の分化に及ぼすフッ素の効果をいくつかのマーカーに基づいて検索した結果、多能性幹細胞から単能性幹細胞、骨髄芽球、前骨髄球、骨髄球、後骨髄球までの早期顆粒球方向への分化が誘導されることが知らされた。それに基づき、飲料水からのフッ素摂取が骨髄細胞の分化に及ぼす影響を知る目的で、100 ppmF (=5.26mM NaF) を10日間与えた6週齢雄 ddY マウス骨髄細胞の分化に及ぼすフッ素の効果を調べたところ、大きな変化を認めなかった。

第23回：5月13日（木） セミナー

### 痴呆症の介護支援を考える —歯科口腔介護の実施にあたり—

本間 和代 助教授

平成7年現在我が国の痴呆性老人は126万人で、老人に占める割合は6.9%と年々増加の一途をたどり、歯科衛生士が歯科口腔介護を実施していくうえで痴呆性老人の特性、介護者の抱える問題点を理解することが重要になってきた。痴呆には7大法則・1原則があり、介護者のたどる心理的ステップにも4段階あって避けておれないことがわかった。痴呆症の症状、原因、接し方等を理解し介護者をどう支援するかを考えながら歯科口腔介護を進めていく必要がある。

### Darwin 医学—進化と 人間適応プログラム

福島 祥紘 教授

ヒトの身体は、必ずしも調和がとれているとは云えない矛盾の塊である。しかし一見不調和に見えるものにも、実は意味がある。進化生物学が基礎医学として認識されてきたのは最近のことで、「ダーウィン医学」と命名されている。新しい環境に、ヒトの身体が適応してゆく際の新しい考え方を紹介する。

第24回：5月27日（木）

### 世界の歯科衛生士教育

石木 哲夫 教授

FDI資料(1990)に従って、世界各国の歯科衛生士制度の現況を分析した。世界38国のうち、看護婦や歯科助手が業務を行っている9ヶ国を除く29ヶ国で、歯科衛生士制度が設けられていた。日本における看護大学(4年制)を例に、Faculty Developmentの必要性を述べた。

第25回：6月10日（木）

### 接着のはなし

下河辺 宏功 教授

接着術式の歯科分野への応用は、歯科技術に変革をもたらした。しかし、接着技術は各ステップごとに詳細な手順が規定されており、その巧拙が治療の予後を大きく左右する。したがって、接着効果を高めるためには、接着の意義、基礎知識を十分理解しておく必要がある。本講義では、歯の硬組織との接着をとりあげ、接着材の物性および被着材(エナメル質、象牙質)の接着形態、表面処理、接着の破壊因子、接着の維持などについて解説した。

第26回：7月15日（木）

### 口蓋裂の言語治療

大平 章子 教授

口蓋裂やその類似疾患による音声言語障害は、言語聴覚障害の数%にすぎない。主たる症状は、共鳴と構音の問題である。開鼻声、呼気の鼻漏出による子音の歪み、声門破裂音、口蓋化構音、側音化構音等が出現する。外科処置等により早期に良好な鼻咽腔閉鎖が獲得されれば、経過観察、治療訓練等により、ほぼ正常な音声言語を習得することが可能である。言語発達障害等の他の言語聴覚障害を合併する場合は、治療方法や予後が異なる。

第27回：7月29日（木）

### 歯の漂白—自験例を含めて

市川 伸彦、金城 敬枝(附属診療所歯科医師)

1988年に認可された歯の漂白剤である松風ハイライトを用いた臨床例を報告した。本剤は有髄歯の漂白

## 歯科衛生士学科研究会講演抄録

において、従来の方法に比べ有効な漂白剤として注目されている。自験例 2 例は 68 才、女性の加齢による黄ばみと 49 才女性の歯の変色に対する漂白である。結果は、患者の審美的満足が得られ本剤の有用性を臨床症例にて確認できた。今後は自験症例の予後経過を追い、第 1 選択肢として日常臨床に生かしていきたい。

第 28 回：9 月 9 日（木）

### 開発歯ブラシの紹介

新井 俊二 教授

歯科医師 8 名、歯科衛生士 15 名、計 23 名を対象に、試作歯ブラシ 3 種類と市販歯ブラシ 1 種類を均等に 1 ヶ月間使用してもらい、歯ブラシの形態と機能性について使用経験を調査した。更に特定歯ブラシとブラッシング方法による清掃効果を検討した結果について述べた。

第 29 回：9 月 30 日（木）

### デンチャープラーク・コントロールの現状と課題

松本 直之 教授（技）

これまでのデンチャープラークコントロールは齶触や歯周病、義歯性口内炎などの防止を目的としたものであったが、近年、高齢化社会を迎え、口腔内細菌と全身感染症との関係からデンチャープラークコントロールに対する取り組み方もより総合的な口腔管理の 1 つとして取り扱われるようになってきた。今回は、一般細菌ならびにカンジダ等の真菌、HBV、HIV 等のウイルスに対して殺菌、殺ウイルス効果がある強電解水を用いて義歯洗浄を行った場合の殺菌効果並びに洗浄方法について報告した。

第 30 回：10 月 14 日（木）

### 口腔粘膜にも性周期があった

福島 祥紘 教授

歯科衛生士学科 2 年生計 9 名に、2～3 ヶ月間にわたり、各自の基礎体温計を毎朝計測し、同時に起床時の無刺激混合唾液の塗抹標本を作製してもらい、1 週毎に染色とデータを集計した。基礎体温から排卵期を推定し、夫々卵胞ホルモン及び黄体ホルモン分泌期と、塗抹標本結果（剥離上皮細胞の数と種類、白血球、細菌コロニー数）とを比較した。その結果、9 名中 8 名

に月経後数日以内に著るしい剥離上皮数の減少を認めた。その意味について述べた。

第 31 回：10 月 28 日（木） セミナー

### 語彙ラーニング・ストラテジー

広瀬浩二 助教授

Oxford, R. L. & Scarcella, R. C. (1994) の論文 Second Vocabulary Learning Among Adults : State of the Art in Vocabulary Instruction System, 22(2). 231-243. に則った「文脈から隔離した」「部分的に文脈のある」「完全に文脈化した」の 3 つの学習法である。

### NaF-induced G<sub>0</sub>/G<sub>1</sub> arrest of child gingival cells in culture associated with necrosis rather than apoptosis by an overdose.

小黒 章 教授

フッ化ナトリウム (NaF) が抗う蝕性を発揮する機構については長い研究の歴史があるが、高濃度の NaF が組織細胞に及ぼす影響については注意が払われていない。これは安全で適正なフッ化物応用にとって不可欠な事柄である。小児歯肉培養細胞に、10, 25, 50 ppm の NaF を 24 時間作用させた。G<sub>0</sub>/G<sub>1</sub> アレストの増加と共にネクロシス細胞の増加が認められ、一方の細胞死であるアポトーシス細胞の増加は認められなかった。

第 32 回：11 月 11 日（木）

### 小児の歯の外傷

小野 博志 教授

乳歯と幼若永久歯の外傷の疫学的特徴と、とくに留意を必要とする症状への対応について長期観察結果を基に述べた。すなわち、乳歯の受傷は 3 歳以下の幼児に多く、しかも低年齢児ほど埋入症例が多い。感染予防処置と経過観察によって好結果を得ることが出来る症例のあることを示した。幼若永久歯では歯冠破折の頻度が高くなるが、歯髄を保存し、歯根形成を進ませることが最も重要な課題である。断髄処置の有用性と長期予後観察の重要性を述べた。また脱臼を伴いやすい歯根破折への対応法と予後について述べた。